

平成 16 年 7 月 9 日
< 4953 佐々木 朗 >

七夕に願いをこめて

1. 七夕の由来

7月7日は七夕である。中国の織姫星（こと座のベガ）と彦星（わし座のアルタイル）が年に一度の再開を許したという伝説に由来するとされている。また、日本においては、機（はた）を織るのが女性のたしなみとされ、それを大切に棚の上においていたことから、「たなばた」と呼ばれる説もある。

また、函館月次風俗書なる古文書によると江戸末期には、この日に子どもたちは、太鼓や笛をならし、町には大きな山車がでたという記録が残っている。

その伝統は引き継がれ、私の小さい頃は浴衣を着て、ちょうちんまたは、空き缶に釘で穴を開けそこにろうそくを立てた「カンテラ」と呼ばれる明かりを持ち、町内の家々をまわりろうそくをもらって歩いた。「竹に短冊七夕祭り、大いに祝おう、ろうそく一本ちょうだいな。」七夕の夜にはこの歌が町内のあちらこちらに響き渡った。現在では、ろうそくが駄菓子に姿を変えたが、日本の伝統の風物詩として今も健在である。

2. 七夕の願いはかないそうな気がして

正月の初詣、七夕など宗教心の有無にかかわらず、日本の伝統行事における「願い」何かしら叶いそうな気がするものである。

七夕の朝、守衛さんに「七夕飾りって例年出ていましたか？」と尋ねると、そのようなことはないらしい。私は、どこかに笹がないかと大学の裏の方へ行った。大学の校舎の周りは、毎日の散策コースとなっていて、笹は見かけたことがない。ということで、まだ、足を踏み入っていないグラウンドそして、道路を渡った向こうの球技場まで足を伸ばした。学生時代に体育で何度か入ったことがある程度で、私にとって未知の世界であった。グラウンドを二分する道路は当時はなく、はるか向こうまでがグラウンドという状況であった。雑草がすくすくと育つ陸上競技場には、笹は見つげられた。押しボタン信号を渡って、球技場へ。男子学生がラグビーの練習をしており、女学生が応援していた。ぐるっと回って、半分諦めかけていた時、一番向こう端の野球場の一塁側に突然、笹畑が広がっていた。驚きと感動である。何の道具も持っていかなかったのも、ぐりぐりして、車の鍵のぎざぎざで引きちぎって、3本の笹を確保した。内心うれしくてしょうがなかった。

研究室のそばまで持ち帰り、困った時たのみの宮家さんに相談して、玄関に飾らせてもらう OK をもらった。3本の笹は、院生室に運ばれ、飾られるのを待っていた。幼児教育と特殊教育の学生さん達に声をかけて、幼児教育から材料を提供してもらい、飾りを作った。国語の院生しつからは半紙をもらい、天の川を作った。

昼休みになって、7号館がにぎやかになってきたのを感じて、糸をつけた短冊を幼児教育、特殊教育、特殊教育大学院にもって行き、短冊の協力をお願いした。皆、快く受けて下さり、昼過ぎには七夕飾りが完成した。

就職、恋愛、部活動など、若者らしい願いがいっぱいになった飾りは正面玄関に設置された。

夕刻前わずかな雨が落ちてきて天候も心配されたが、子どもたちの七夕は楽しめそうである。夕方に玄関にしてみると、女学生がノートに願い事を書いて吊るしながら、玄関前で涼んでいた。

「もしかして、まだ短冊を書きたい人がいるのかな。いや、今の若者はそんなに興味ないかな。」と思いながら、院生室でさらに20枚短冊を作り、糸を結んだ。玄関にもって行き、余っていた机を出し、「七夕です。願い事は叶うものです。」という掲示と、短冊、マジックを置いた。

9時になり、そろそろ引き上げようと思い、玄関まで行ったところ、短冊が一枚も残っていない。みんな飾りに結び付けられていた。

「みんな協力してありがとうね。願いはきっと叶うからね。」と思いながら、飾りを外し、部屋へ戻った。

3. 日々の生活に潤いを持てるような先生に

やっぱり教育大は、季節の行事には敏感であってほしい。子どもには日本の伝統的な文化を大切にする大人になってほしい。そして先生を目指す学生さん達にも然りである。今の学生さんたちは、毎日の生活は忙しく、余裕のない日々を送っているのかもしれない。でも、どこかに七夕のロマンをちょっぴり肌で感じて、楽しみを持てる余裕を作っていただければと思った。

レポート、修論などやることがたまっている中、ビデオに手を出し、そしてついつい目先のことに七夕まで手を出してしまう、自分がなんとなく憎めなくていいなあなんて、自己満足していました。

「先生になりたい」と願いを書いた短冊も数枚見つけた。是非、その願いが天に届くことを祈りたい。